



# 紙と台本 鴻上尚史

演劇をやっている人間からすれば紙とは、台本のことである。

「こればかりは、どんなにコンピュータ化が進んでも変わらなない」と思ふ。僕は普段は二種類の台本を使っている。ひとつは、僕のパソコンからプリンアウトしたものを、そのままコピーして使うパターンだ。

公演の規模が小さかったり、芝居に参加してくれる俳優さんが、みんな慣れ親しんだ人の場合は、このタイプを使う。もうひとつは、製本会社に頼んで印刷してもらうパターンだ。

公演の規模が大きかったり、初めての人が多い場合、このまともなパターンを選ぶ。

「ごちも紙なのは当たり前だ。紙だからこそ、いろんなことができるのだ。」

「一番多いのは、自分のセリフ全部にマーカーでラインを引く人だ。ただし、これは気をつけないと、自分のセリフだけを見がちになる。セリフは、相互との関係から生まれるので、相手のセリフを理解することも、自分のセリフを理解することと同じくらい大切なことだ。」

俳優さんによっては、台本にびっしりいろんなことを書き込む人もいる。

演出の指示だけではなく、自分で気づいたこと、セリフの感想、またはその日の気分や相手役の似顔絵まで書いている人もいます。

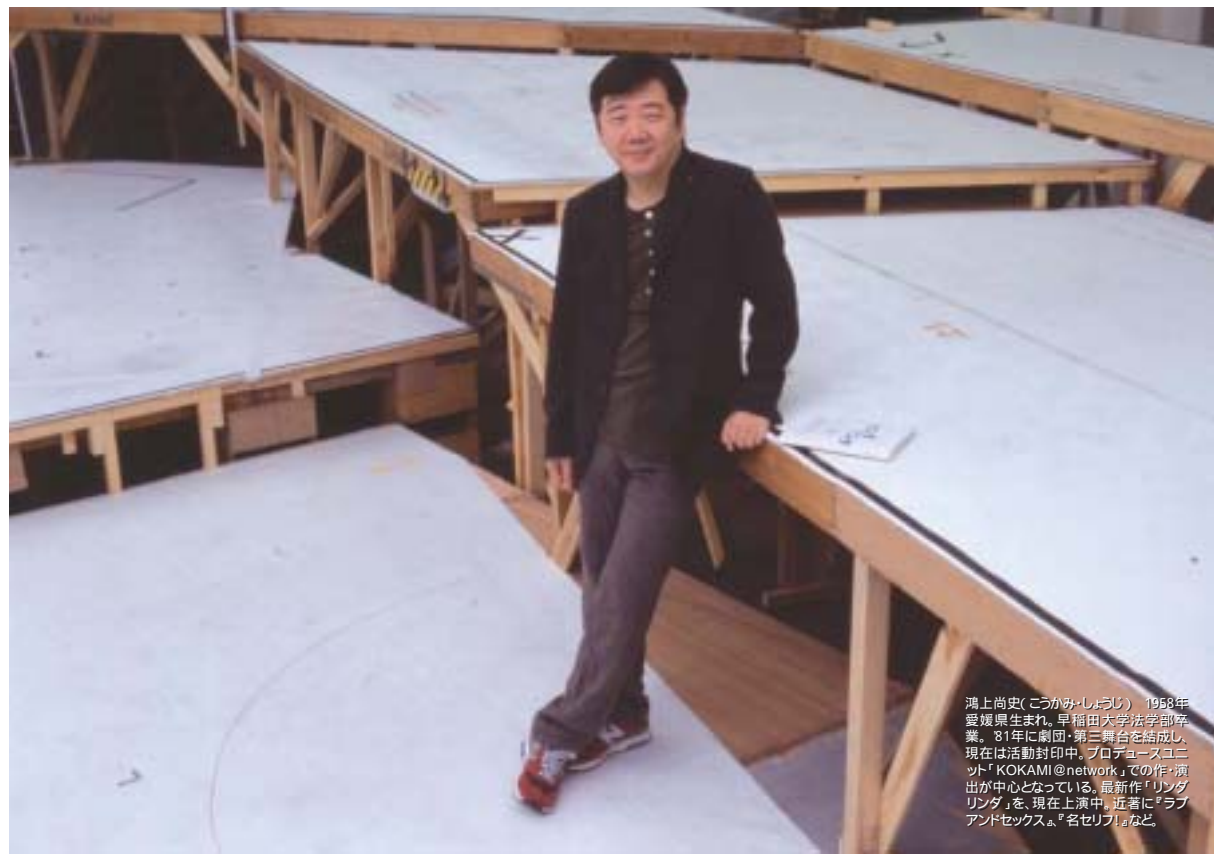
ある有名な俳優さんは、台本に、自分の役の感情の状態をページごとにグラフにして、書き込んでいたといふ。

演出家が、その台本を偶然見かけた。その俳優が出ていないシーンにも、グラフが書かれていたそう。

「ごちですと、と俳優に聞けば、「出てはいませんが、この時、私の役は「ごち」状態なんです。」

「へ、その俳優は答えた。」

つまりは、出てないシーンをちゃんと



鴻上尚史(こうかみ-しょうし) 1958年愛媛県生まれ。早稲田大学法学部卒業。81年に劇団・第二舞台を結成し、現在は活動封印中。プロデュースユニット「KOKAMI@network」での作・演出が中心となっている。最新作「リンドラ」を、現在上演中。近者に「ラブアンドセックス」、「名セリフ」など。

自分で作っていたのだ。前のシーンを去った後、私の役は、家に帰り、食事をして、ちよっとほっとして、次の出番までの出来事を自分で全部作っていたのだ。質問した演出家は、それがどういうシーンなのか、知りたくてたまらなくなつたそう。

きれいすぎる台本より、染みがあったり、シワがあったり、破れていたりする方が、はるかにセリフは覚えやすいのだ。

コーヒーなんかを飲みながら、台本を読んでいたりと、うっかりこぼしたりする。これが、じつは、セリフを覚える手がかりになったりするのだ。

誰もが日本史や世界史の教科書に、覚えるための落書きをしたはずだ。汚れれば汚れるほど、覚えやすくなった。台本も同じである。そのためには、やっぱり紙の台本が一番なのだ。

## PAPER Q&A Vol.8

Q. 海外植林は、どうやっているんですか?

A. 平らな土地に畑のように植えています。

海外では、牧場跡地や荒れた土地などの広大で平坦な土地に植林をしています。写真のように人が苗木を1本1本手で植えていきます。日本のように急峻な地形ではないので、伐採や運搬を機械化出来るメリットがあります。まるで、畑で野菜を育てるように樹木を育てています。

製紙業界では、2010年までに国内外合わせて55万haをめざして積極的に植林を行っています。



オーストラリア南西部で植樹をする



次回は12月30日・1月6日号、なざら健彦さんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Yohei Maruyama